台湾餐旅教育簡史（1977-2001）
李福登氏の貢献を中心に

A Brief History of Taiwan Hospitality education
Mainly the contribution of Dr.Fudeng LI

潘 江 東・楊 政 樺・紙 矢 健 治

キーワード：台湾、餐旅、餐旅教育史、李福登

1．はじめに

国立高雄餐旅大学（以下、本稿では「高雄餐旅」と称する）初代校長の李福登氏が1992年８月に提起した「餐旅」は、従来の観光学という概念をはるかに超えたもので、90年代後半以降、台湾・中国の経済が成熟するプロセスの中で、急速に普及した学際分野である[1)]。日本語では「ホスピタリティ」と訳される。ただ台湾では、単純に「餐旅」が時代に求められたから登場したというものではなく、李福登氏という一人の教育者が、自ら蓄積してきた理念と、李氏の万人を感動させる改革のエネルギーをもって、はじめて創造できた分野であったからこそ、とりわけ教育部技術及職業教育司所管の技術及職業教育（以下、技術職業教育と略す）の家政類を中心とする分野において、その影響力を拡大できたのである[2)]。ホテルや旅行社、航空会社など観光業界における人材ニーズと、大学のシーズを結びつけたことにより、教育の社会における存在感は高まり、その影響は教育部高等教育司所管の一般の

1）国立高雄餐旅大学の前々身である国立高雄餐旅管理専科学校は、李福登氏によって1995年12月に創立され、2000年8月に国立高雄餐旅学院（大学）に昇格し、2010年8月に国立高雄餐旅大学となった。

2）台湾の大学は教育部高等教育司が所管する大学・独立学院と技術及職業教育司が所管する技術職業系大学の技術学院（総合大学は「科技大学」）と短大・高専に相当する専科学校の2系統がある。学生募集は別々の統一試験によって実施されるが、最近では単独募集「単招」も行われる。技術及職業教育は「技職」と略されることが多い。

大学や独立学院を含めた台湾のすべての大学・短大全体にも及んだ。大学や短大における観光教育の振興は、容易なものではない。台湾でも日本でも、そもそも大学における観光教育とは、専門学校の領域に追従するべきものではなく、研究と教育をそれぞれしっかり行わなければならない。李氏は、豊富な実務経験を持つ人材を登用し、ハード面では、大規模なシミュレーション設備を整備し、半年から１年間の有給の校外実習を受け入れる産学合作の企業を獲得してきた[3)]。数百にも及ぶ校外実習受け入れ企業は、台湾の最低賃金を遵守した給料を払い、校外実習に出かける学生は、その給料で卒業時に実施される海外研修に参加する。李福登氏の創造力によって、校内学習、校内実習、校外実習、海外研修などを重ね合わせるサンドイッチ教学が完成され、斬新で旧来の硬直化した制度を突破するエネルギーをもった制度を創造するなど、餐旅教育は、台湾の教育界において核心的な教育領域となった。

李氏は、教育家として、長年にわたる大学経営者としての経験、そしてひいでたる人間性をもって、一つの時代史を創造するエネルギーを放ってきた。

本稿では、教育家、李福登氏だからこそ創造できた餐旅教育の、その成立までの流れを検証し、餐旅教育史として記すことを目的としている。著者（３名）は、それぞれの立場で、李氏に薫陶を受け、そして、それぞれが教育の場で、今も李氏のうちたてた教育理念を受け継いでいる。われわれは、台湾の餐旅教育の歴史は、李福登氏の家政類大学校長就任時、つまり1977年に始まり、餐旅類の創設を見る2001年までの、前世紀のかがやかしい歴史であると強く確信するものである。

２．先行研究について

日本における台湾の餐旅教育に関する先行研究は、管見の範囲ではあまりない。紙矢（2006）「台湾のホスピタリティ教育の現状と課題（1996-2006）」

３）現在では、数百の校外実習受け入れ企業があり、日本やマカオなどアジア諸国、欧米でも校外実習を行っている。

『日本観光学会誌』第47号（p69-75）や「台湾の職業系大学におけるインターンシップの現状～観光系教育機関サンドイッチ教学」『産業教育研究』第37巻１号、日本産業教育学会（p63-70）などがある。台湾における餐旅教育そのものに関する論著は数多く、それらのほとんどは、国家図書館で見られるので参照されたい。一方で、餐旅教育を創造した人物史や餐旅教育史についての論著は、まだない[4)]。本稿の意義とは、台湾における餐旅教育の歴史と、その建設に大きな役割を果たした李福登氏の教育家としての歴史を振り返ることである。

３．教育家　李福登氏について

李福登氏は1939年、台湾嘉義に生まれた。1977年８月に台南家政専科学校校長に就任し、2003年６月に国立高雄餐旅大学校長を退官するまで、校長としての在任期間は26年にも及ぶ。まさに台湾第一の校長である。一つの大学において、とりわけ私立大学においては、長期間、理事長を務める例は少なくないが、オーナーではない教員が、これほど長い期間校長を務める前例はない。李氏とは、それほど卓越した教育家であり、台湾の技術職業教育界において、また教育部という所管する官庁から見ても、ひときわかがやく逸材であった。国立高雄餐旅大学の創設に力を尽くした後、現在は、高雄市大湖区にある東方設計学院董事長の職を勤めている。台湾の総統府の国策顧問として、現政権の執政者である馬英九総統の推し進める観光政策に大きな影響を与え続けている[5)]。

4）国家図書館ホームページを参照されたい。検索もできる。http://www.ncl.edu.tw/mp.asp?mp=2

5）現在、台湾の総統府の公式ホームページが公表している李福登氏に関する項目は56項目にもおよぶ。(2013年5月15日現在)

（表１）李福登氏の略歴について

年　度	歴　　史
1977年度	私立台南家政専科学校長に就任
1990年5月	教育部より私立国際商業専科学校の混乱の収拾にあたるべく、代理校長として同校に赴き、70日間で円満な解決をはかる。このころから「教育部救火隊長」と称されるようになる。
1992年度	教育部より、政府が推進していた「アジア太平洋オペレーション構想」をホスピタリティという新たな領域において支援するための教育機関の設置のために高雄市小港区に派遣される。国立高雄餐旅管理専科学校籌備処主任に就任。
2001年度	四年制技術学院・二年制専科学校、二年制技術学院など技術職業系大学の統一入学測験に「餐旅類」が新設され、餐旅を全国的なスタンダードに育成した。高雄餐旅設立後、5年余りで、およそ30の技術職業教育系大学に餐旅類学科が設立されるなど、教育界に新風をまきおこした。
2002年度	国立高雄餐旅学院校長を退職。
2010年度	東方技術学院董事長（理事長）に就任、より特色のある大学教育をめざし、大学名を東方設計学院に変更する。
	台湾教育史初の「技職教育貢獻奬」を教育部から授与される。

（備考）「技術職業教育卓越貢献奬」「技術職業教育終身栄誉奬」「教育文化奬章」など国家的な賞など受賞歴は多数に及ぶ。「台湾餐旅教育之父」と呼ばれる。

４．餐旅教育簡史

4.1家政類大学の校長として

李福登氏は、台南家政専科学校（以下、台南家専と略す）校長を1977年から15年間勤めた。38歳での校長就任であり、その若き教育家の登場に台湾社会は注目した。この時代、人口に膾炙される有名な言葉として「未婚男性は教員に採用せず」という李氏の教員採用理念が知れわたり、女子教育の場における教員の節度を徹底的に貫いたと言われる。これについては、台南家専に明文化された規定があるわけではないが、台湾の教育界では、今でも数多くの人々が語り継いでいる。餐旅類の祖である家政類の女子短大を経営する

教育家として、そうした心構えはかえって優れた理念に見える。台南家専は、その後、1997年７月、台南女子技術学院（大学）へ昇格し、2006年６月には台南科技大学となった。2010年10月に台南応用科技大学と改称したが、古都台南近郊に位置する大学として歴史が長く、1965年の設立から李福登氏の校長時代を通して、その基礎は築きあげられ、そのため李氏に対する評価は高い。台南応用科技大学は、現在では4学部、19学科、５研究科（修士課程）をようする総合大学へと発展し、とりわけ李氏が校長をつとめた時代からの伝統である家政類の学科を中心に発展を続けており、その特色を生かした大学づくりに今後も期待がもたれるところである。

4.2「国際商業専科学校」の重大事件円満解決の功績について

①国際商業専科学校廃校

1991年5月、台湾の教育史に残る重大な事件が起こった。学校事務に対する董事会（理事会）の過度な干渉と赤字に伴う教員への給与の未払い、数名の教員に対する学期途中での契約解除などの改善・撤回をもとめて教師学生聯誼会2000人が、授業のボイコットを行うなど、混乱が続き、マスコミはこの問題を大きくとりあげた。未曾有の事態に、日本の文部科学省に相当する所管官庁である教育部は、その対応に苦慮していた。そこで、台南家専校長であった李福登氏の、教育家としての手腕を高くかっていた教育部は、李氏に解決を要請し、李氏は単身で高雄市苓雅区にあった国際商業専科学校に代理校長としておもむいた。李氏は、そこでたった70日という短い期間において解決を図っていった[6)]。まず、不払いとなっていた教員への給与の支払いなど、喫緊をようする問題を処理しながら、経営側をはじめとする問題について精査を行った。この詳細については、李福登『国際商専七十天』を参照されたい[7)]。

6）聯合報、2010年5月23日。
7）李福登『国際商専七十：代理校長期間的心路歴程』台北：漢家出版社、1992年。

この間のいきさつを簡単にまとめると次のようになる。

教育部の命により、1990年５月21日に代理校長の身分で、国際商専の混乱の収拾にあたった。この間、６人の教員などに対する1990年度の6月7月分の給与や時間給47万元余りを支払った。11月15日に旧国際商専経営側に返還を求めたが、６人の教員は1990年５月３日をもって解雇されているので、応じられなかった。

また、旧経営陣は1989年度において教育部が当時のY校長の年功と条件が教育部の規定に適合しないことから、Y校長の校長人事に認可を与えない公文を送った（1989年４月20日付）。当然のことながら、規定に即して、新校長の人選を行うべきであったが、それを行っていなかった。教育部は1990年５月21日より、李氏を代理校長として派遣し、５月29日校長引き継ぎを行った。

（最高法院、1991年台上第2519号判決の内容の一部を整理した。）

国際商専処理の問題は、旧経営側によって相当の資金を費やして訴訟に持ち込むなどしたが、李氏は、あらゆる問題解決のプロセスにおいて、在学生と現有教員の権益を護りぬいた[8)]。それは、1977年から台南家専において培ってきた教育家としての責任感・正義感の基づく信念があったからこそ、貫徹できたことであって、李氏をかかる事態を収拾できる唯一の人材として選んだ教育部の判断には、まったくまちがいはなかった。

②国立高雄工商専科学校の成立～「教育部救火隊長」としての李氏の存在

李氏は、これら諸問題が、通常の手段では改善できないものであると判断、廃校を決断し、当面の問題として在学中の学生と教員の処遇が問題となった。そこで李氏は、それまで工業科の単科大学であった国立高雄工業専

8）最高法院、81年台上字第2519号判決（2002年10月30日）による。

科学校に吸収させる方式で、国際商専の学生と教員の受け入れ先を確保した。台湾教育史において私立大学（短大）そのものを国立大学（短大）が吸収合併することは、後先にも国際商専の例しかない。

一方、国際商専という商科専門大学を受け入れることは、国立高雄工業専科学校側にとっても大きなメリットをもたらした。というのは、1991年８月、工科単科大学（短大）であった国立高雄工業専科学校は、国際商専の商業類学科を吸収し、これによって工科の単科大学が一挙に国際貿易学科や観光事業科などの学科を学内に設置し、一躍工商両科をようする総合大学への基礎を獲得したのである。本来、工科専門の大学内に別の類別の学科を立ち上げるには許認可に至るまでの煩雑な手続きと時間を要する。国際商専の吸収合併は、事態の収拾のため、そのまま国際商専という大学（短大）が、「学部」として高雄工業専科学校内に持ち込まれたようなもので、高雄工業専科学校のその後の発展を見るとき、李氏によるその国際商専処理が大きくプラスに作用したことは言うまでもない。李氏の英断が二つの大学の合併を実現させ、1992年度に国立高雄工業専科学校は、「国立高雄工商専科学校」に改称した。

その後、1995年７月、高雄工商専科学校から遠くない高雄市楠梓区と燕巣区にまたがる広大な敷地に国立高雄技術学院が開学した。同大学校長の谷家恒氏は、その時点から「国立高雄科技大学」への昇格を目指していた。一方、1997年8月に、２年遅れて高雄工商専科学校も高雄応用技術学院に昇格した。この時、すでに高雄工商専科学校が、大学として設立された国立高雄技術学院と「国立高雄科技大学」への昇格を互角に競えたのは、当然のことながら、李氏による国際商専の問題処理の結果、装いを新たにした国立高雄工商専科学校が総合大学としての条件を整えることができたからである[9)]。なお、李氏の処理策を受け入れた国立高雄工業専科学校の呉建国校長（当

9）国立高雄技術学院と国立高雄応用技術学院（国立高雄工商専科学校）が国立高雄科技大学に昇格を競ったことは教育界では今でも語られることである。その競争がはげしいことから、国立高雄技術学院は「国立高雄第一科技大学」に、国立高雄応用技術学院は「国立高雄応用科技大学」に昇格した。

時）は、この件等で高い評価を受け、翌年の国民代表選挙に出馬し政治家へと転出した[10]。

李氏が「教育部救火隊長」と呼ばれるようになったのは、台湾教育史における解決困難な、稀有な混乱を、損失を被る人なく、かえって当事者それぞれに大きなメリットを与えながら、円満に解決できる英知を有しているからであり、その実績を讃えられてのことである[11]。

4.3　国立高雄餐旅の設立

李福登氏は、李登輝政権が推進していた「アジア太平洋オペレーション構想」の推進に呼応して、教育部は、ホスピタリティ分野での人材育成を目指し、高雄市小港区内台湾製糖会社の所有地（甘蔗畑）15ヘクタールに、新たなタイプの専門大学を創設することを決めた。そしていち早く、籌備処（準備処）主任に李福登氏を任命した。籌備処は、同じく小港区大業北路に設置された[12]。

李氏は、教務担当者に呉武忠氏を、校外実習担当に潘江東氏を起用し、ヨーロッパやアメリカのホスピタリティ専門大学のシステム・経験に関する情報を積極的に集め、自らもローザンヌ・ホテルスクールなど著名な大学をたびたび訪問するなどして２年半の期間をかけ、それらを台湾の実情に合わせながら、独創的なシステムである「サンドイッチ教学」を考案した[13]。

4.4　斬新な餐旅教育システム～サンドイッチ教学の誕生

ホスピタリティ分野関連の学科は2001年度に餐旅類が設立されるまで、家

10）国立高雄応用科技大学ホームページ（校史）

11）「李福登 獲首屈技職教育貢獻奬」自由時報、2002年5月20日。

12）現在の高雄市立空中大学の位置にあった。

13）呉武忠氏は、国立高雄餐旅管理専科学校教務主任などをつとめた後、一時、銘伝大学観光学院長をつとめ、国立高雄餐旅学院國際事務処長などを歴任した。

　ローザンヌ・ホテルスクール（Ecole Hoteliere de Lausanne）は、スイスローザンヌに1893年に設立された世界的なホスピタリティ専門大学であるが、同大学の採用している校外実習を中心とする実務教育には国際的にも、その評価は高い。

政類に属するか、あるいは独自の学生募集を行って来た。教育部が高雄でホスピタリティの専門大学を設立するにあたって、李福登氏を設立の責任者に登用したのは、家政類の大学で長らく校長をつとめ、かつ問題を解決する手腕を国際商専の処理で、余すことなく、その能力を発揮した李福登氏を高く評価したからであって、筆者は、家政類の大学の校長経験者という理由だけで、李氏が起用されたのではないと考える。

高雄餐旅は、当初、「国立高雄餐旅管理専科学校」として設立され、二年制短期大学としてのスタートをきった。１学年４学科200名の定員の短大には想像のつかない規模の実習大楼（シミュレーションビル）を設置し、そこでの校内実習を通じて高いスキルを習得した学生を集中的に育成した。

李氏は「サンドイッチ教学」を初めて制度として開発し、学内学習と校外実習のウェートをほぼ50対50とした。１年生後期と２年生後期の２回（約１年間）を産学合作の企業で、いわば社員に準ずる身分で、給料を得ながら実務をホスピタリティ関連企業の職場でまなべるシステムとした。つまり１年生前期は校内学習、１年後期は校外学習、２年前期は学内学習、２年後期は再び校外実習というように、学内学習と校外実習をサンドイッチのようにはさんだ制度である。加えて、１年間に２度（春季・秋季）学生募集を行った。旅館管理科、餐飲管理科、旅運管理科、厨芸科の４学科体制であったが、校外学習において台湾国内のファイブスターホテルや有名旅行社を中心とするホスピタリティ関連企業で、「校外実習」を行い学生は校外実習の段階で高い評価を得ることになる[14)]。この「校外実習」とは、日本で実施されているインターンシップとは、その性質がまったくことなる、有給の実習であり、また実習中は、学生は学校にもどることはない。その結果、学生側に企業における実務教育の機会を与え、それらの企業にとっては、半年ごとに高いスキルを持つ若い人材が継続的に供給されるシステムをつくった。しかも

14）高雄餐旅管理専科学校学生の身分で校外実習に出た学生が、実習中にチームリーダー（領班）に抜擢され、卒業・就職と同時に次長（副理）級の地位で採用されたケースが続出した。

実習中の成績の60パーセントは受け入れ企業の上長が評価するため、実習生の忠実度が高く、双方に大きな利益を与える斬新なシステムである。しかしながら、従来、企業は大学の学生を実習生として長期にわたって受け入れる余裕などないにもかかわらず、こうしたシステムを作り上げたことは、並大抵のことではない。李氏のトップセールスをはじめ、実習大楼のシミュレーション設備において、ホテルや旅行社の国際有数の実務家を教員として投入し、事前の実践教育を行うとともに、それらの実務家教員を通じたセールスが「実習就業室」を中心に行われたからである[15)]。

（表２）国立高雄餐旅管理専科学校発足当時のサンドイット教学システム

１年前期	１年後期	２年前期	２年後期
校内学習 （校内実習）	校外実習	校内学習 （校内実習）	校外実習

（備考）その他にも「労作教育」(学内で実施)「海外参訪（海外研修）」(欧州を中心に半月前後実施）などがある。校外実習をはじめすべてが必修科目である。

その後、４年制技術学院（大学）に昇格するなどのプロセスを経て、このサンドイッチ教学システムは数度の改良を経て、大学教育にふさわしい内容に変化しているが、本稿で2001年までの餐旅教育史が主たるテーマであるのでふれないことにする。サンドイッチ教学の校外実習や海外研修、労作教育などは、いずれも必修科目であり、今でもその伝統は受けつがれている。

4.5　教員人材の育成

李福登氏は、高雄餐旅の設立にあたり、潘江東氏（実習ネットワーク構築）、容継業氏（旅行社実務家）、陳文聡氏（フード＆ビバレッジ実務家）、蘇恒安氏（厨房技芸実務家）、黄栄鵬氏（旅行社実務家）、張健豪氏（航空会社実務家）など、高雄餐旅の建設を当初から支えていた人材の発掘や育成を

15）高雄餐旅管理専科学校では「実習就業室」が校外実習を引き受けており、その初代主任は潘江東氏である。

大車輪で進めた[16]。とくにこれらの人材は、いずれも講師級から出発し、その後、在職のまま台湾国内の大学院に進学し、いずれも博士学位をとり、現在では高雄餐旅で重きをなす立場にある。台湾の餐旅教育の先頭に立つこれら逸材も、すべて李福登氏の抜擢と薫陶によって育成されたといっても過言ではない。

実務家教員を採用するために1996年６月には、教育部は「大学聘任専業技術人員担任教学辦法」が制定し、より弾力的な人材を登用する大学法における「法律及法規命令」ができるようになった[17]。そもそも台湾の大学教員は、教育部学術審査委員会の審査を経てのみ登用が可能で、大学法や教師法によって、その学位資格が細かく規定され、各大学には自主的に教員を採用する権限はなかった。規定に従って、修士学位以上を持たない実務家は、教員としては登用できなかったし、修士学位があったとしても講師での採用であった。大学における研究・教育の能力を認定するには、大学法や教師法という客観的かつ一律の基準があった。しかも、修士学位は２セメスター（１年以上）在学し、３分の２以上の出席記録があり、成績記録は不可欠とされた。ディプロマ・ミルを防止するために、台湾国外の大学の学位認定には、細かい規定も定められており、台湾国内で大学教員登用のさいに認可とされる各国大学のリスト（参考名単）も「法律及法規命令」の付表四「国外学位或文憑認定原則」によって詳しく定められている[18]。これによると日本の論文博士は認可条件に該当せず、フィリピンに至っては台湾が認定する学位を授与する大学はわずか４か所に限られるほど厳格なものである。

教育部は、研究・教育を行う教員と実務教育を行う「専業技術人員」としての教員の二つを明確に分け、実務家の弾力的な登用を可能とした。世界的に評価の高いホテルレストランのシェフを講師級専業技術人員として採用す

16）教師コードなどに基づいて序列を決めた。
17）2009教育部学術審議委員会『専科以上学校教師資格審査法規選輯』台北：教育部、2009年6月、P113。
18）同上、P78-100。

るなど、李氏がこの新たな制度の確立に大きな影響を与えたことは言うまでもない[19]。

4.6　餐旅のスタンダード化～統一入学測験「餐旅類」設立

教育部は2001年10月、技術職業教育系の科技大学・技術学院・専科学校の「技専校院入学測験（大学入試センター試験）」の学科類別に「餐旅類」が増設した[20]。同時に、大学・短大に相当する四技二専では「餐旅概論」と「餐飲実務」が、５年制高専や短大に相当する専科学校卒業者を専門に受け入れる二年制技術学院（二技）では「餐旅管理」と「服務業管理」が、試験科目にそれぞれ定められた[21]。それを受けて、技職校院入学測験センターが実施する統一入学試験は、新類別のもとで、2002年度より実施され、「餐旅類」は１万人を超える志願者を出した。李氏のうちたてた餐旅教育は、台湾の教育のスタンダードとなり、まさに新しい時代に突入したのである。

李氏は、これを機に2002年度をもって高雄餐旅校長を退職することを決めた。「餐旅類」が教育部の類別としてとり入れられたことは、一つの時代を創った教育家、李福登氏の集大成と言える。2001年度時点において、112校もの高級職業学校や高級中学（いずれも高校に相当）が餐旅類に属する学科を設置し、大学に至っては、技術職業系技術学院では29大学、高等教育司所管の大学・独立学院でも15大学が餐旅類学科を設置した。約170校の大学のうち、４分の１を超える大学に餐旅類学科をようするに至った。これは台湾の技術職業教育史におけるかがやかしい成果であると断言できる。

19）同上、1995年12月に開学した高雄餐旅では、とりわけ厨房科での実務家教員の登用が急務であったことから、1996年６に同辦法の制定に高雄餐旅が影響を与えたことは言うまでもない。

20）「教育部技職校院入学測験四技二専新増餐旅類説明会　会議手冊」教育部技職校院入学測験中心、2001年10月30日。

21）教育部　函　台（90）技（二）字第90136992号。

５．まとめにかえて

餐旅教育簡史と題して本稿を書き上げたが、筆者が伝えたいことは、李福登氏の1977年の台南家政専科学校長就任から技術職業教育系科技大学・技術学院において「餐旅類」が新設する2001年までの期間の歴史こそ「餐旅教育史」であったということである。さらに強調して言うならば、李氏の1977年から2001年までの足跡自体が、餐旅教育史そのものであるということである。本稿は、簡単な内容ではあるが、李氏が国家的なさまざまな課題を解決し続け、国立高雄管理専科学校をたちあげ、そして教育部の定める類別として「餐旅類」を新設するまでの歴史を、台湾餐旅教育簡史としたが、それこそ李氏の教育家としての人生そのものであった。教育家としての李氏は、すばらしい人間性を核とし、教育家としての信念、長い大学経営の経験などによって、国家の礎を成す立場となったことは、本稿で存分に紹介できたのではないだろうか。

われわれは、李氏に薫陶を受けた者として、ここであらためて李福登氏に心から感謝申し上げたい。李氏の餐旅教育、そして教育家としての理念は、先進国となった台湾の新時代の教育界において、不死鳥のようなかがやきを放ち続けるだろうことを確信する。

参考文献

李福登『国際商専七十：代理校長期間的心路歴程』台北：漢家出版社、1992年。
李福登『拾穂集』台北：生智文化事業有限公司，2003年6月（ISBN：957-818-507-3）。
李福登『悠然集』高雄：人生書局，2009年10月7日（ISBN：978-986-7826-30-5）。
李福登『獨創三明治教學法的高雄餐旅學院』台北：教育部技術及職業教育司（中国文化大学推広教育部『校園天地』第73期、2007年3月）
監察院編『提升技職教育水準增強就業能力専案調査研究報告』台北：監察院、2010年5月初版（ISBN：978-986-02-3558-6）。
教育部編『八十学年度　公私立大学校院一覧表』教育部：1991年度版。
2009教育部学術審議委員会『専科以上学校教師資格審査法規選輯』台北：教育部、2009年６月。
教育部『建国百年技職教育専刊』台北：教育部、2011年９月。
行政院経済建設委員会『推動高等教育實習制度強化專業人才培育』台北：行政院経済建設委員会、2008年12月。

紙矢健治（2006）「台湾のホスピタリティ教育の現状と課題（1996-2006）」『日本観光学会誌』第47号。
紙矢健治（2007）「台湾の職業系大学におけるインターンシップの現状～観光系教育機関サンドイッチ教学」『産業教育研究』第37巻１号。
蕭静雅等「国際観光旅館対於餐旅管理学生専業能力-満意度之研究-以大専院校為例」『北台湾学報』（第30期）台北：北台湾科技学院、2007年年３月。

ホームページ
台湾　中華民国総統府ホームページ
http://search.president.gov.tw/
教育部
http://www.edu.tw/
国家図書館
http://www.ncl.edu.tw/mp.asp?mp=2
国立高雄餐旅大学
http://www.nkuht.edu.tw/
東方設計学院
http://www.tf.edu.tw/
台南応用科技大学
http://www.tut.edu.tw/
国立高雄応用科技大学
http://www.kuas.edu.tw/front/bin/home.phtml
Ecole Hoteliere de Lausanne
http://www.ehl.ch/
自由時報
http://www.libertytimes.com.tw/

（執筆者）
潘江東（国立高雄餐旅大学副校長・台湾飲食文化産業研究所副教授）
楊政樺（国立高雄餐旅大学航空暨運輸服務管理系副教授兼主任兼運輸與休閒服務企画学程主任）
紙矢健治（徳山大学教授）